

<調査報告>

フィリピン（セブ島）語学留学の実態調査 —外国語学部開講「海外実習」の新規派遣先開拓を見据えて—

渡部 由吾¹

この調査は、外国語学部が実施する「海外実習」における新たな派遣先の開拓を見据えて、フィリピン（セブ島）語学留学の実態を調査したものである。調査の背景には、コロナ禍後に留学希望者が減少していることにあり、特に「海外実習」における履修者数の減少が著しく、その主な原因となっているのが費用であった。

フィリピン（セブ島）での「海外実習」を実施することで考えられるメリットは①費用の安さ、②短期間での英語力向上、③異文化交流の機会である。マンツーマンレッスンを中心とした授業により、効率的に英語を学べる環境が整っており、費用も他の英語圏と比べて大幅に抑えられる。一方で、懸念点としては①非ネイティブの英語、②発展途上国特有の生活環境や治安の問題、③受入先大学の確保が挙げられる。

本稿では、調査結果を踏まえ、フィリピンを「海外実習」の新たな派遣先として検討した場合の可能性とメリット及び懸念点について報告する。

キーワード：海外実習、フィリピン語学留学、英語力の向上、マンツーマンレッスン

1. はじめに

本調査の目的は、外国語学部が開講する「海外実習」における新規派遣先の開拓を見据えた、フィリピン語学留学の実態調査である。

外国語学部では、主に1年次生（7セメ生まで履修可）を対象とした海外実習（約3週間の短期留学プログラム）を開講している。なお、当該科目は希望した学生が履修する選択科目である。

現在の派遣先は英語圏【アメリカ・イギリス・オーストラリア】、ヨーロッパ言語圏【ドイツ（2大学）・フランス・スペイン・イタリア・カザフスタン（現在協定締結に向け調整中）】、アジア言語圏【中国・韓国・インドネシア】の11か国、12大学を派遣先としている。学生は希望の派遣先に応募し、選考を経た上で履修する。授業は1年次秋学期（ロシア語圏は2年次春学期）に事前授業を受講した後、1年次終了前の春休み（ロシア語圏は2年次夏休み）に現地で実習を行い、帰国後に事後授業を行っている。

海外実習では、入学後からの1年間で学んだ語学力の成果を認識させるとともに、2年次以降の学修や長期留学への動機付けを狙いとしている。加えて、留学を経験する事で日本とは異なる文化や価値観に触れ、そこから得られる学びによる人間的成長にも期待が出来る。

外国語学部では海外実習の履修を推奨しているが、海外実習の履修者数はコロナ禍前と比べて減少傾向である。表1は言語圏別の海外実習の履修者数である。2018年度の海外実習の履修者数の総数は411人だったが、2023年度は112人、2024年度は94人とコロナ禍前と比べて約75%減少している。言語圏別で見ると、英語圏への履修者数は2018年度に255人だったのが、2023年度は20人、2024年度は25人と約90%も減少している。ヨーロッパ言語圏では元々履修希望者が少なかった事もあり、コロナ禍以降は最低催行人数に満たず実施出来ていない派遣先もある。一方で、アジア言語圏に関してはそれほどの減少が見られなかった。

表1 言語圏別履修者数（2018～2024）

※ 2020～2021年度はコロナ禍により不開講

派遣先言語圏	2018	2019	2022	2023	2024
英語	255	200	8	20	25
ドイツ語	31	17		20	9
フランス語	22	11			
スペイン語	21	13	12		
イタリア語	15		13	13	
中国語	19			26	19
韓国語	32		22	24	27
インドネシア語	16	19	22	9	14
合計	411	260	77	112	94

¹ 京都産業大学 教学センター 外国語学部事務室

「海外実習」の履修者数の減少の主な原因となっているのが費用の増加にあると考えられる。昨今の物価上昇や円安の影響により研修校での授業料が高額となっている。さらにはエネルギー資源の高騰も影響し、航空券も値上がりしている。このように、様々な要因によって海外実習への参加費用が増加した結果、学生が参加を希望していても経済的に難しい状況が続いている。

この問題を解決するため、新たな派遣先として費用を抑えられる地域を探すことを考え、今回は履修者数の減少が著しい英語圏への派遣先としてフィリピンを候補とした。

本調査では、著者自身の現地での語学留学経験および現地に留学している日本人留学生へのアンケート調査を基に、フィリピンでの海外実習の可能性について検討した。調査項目はフィリピン語学留学の授業内容、英語力の向上、現地の治安、生活環境、異文化体験による学び、受け入れ先大学の確保についてである。

2. 「海外実習」履修者減少原因と解決策

外国語学部では、言語運用能力の向上や長期留学へのきっかけ、異文化交流などを目的として、学生が専攻している言語全てで、約3週間の海外実習を実施している。しかしながら、前述したように履修者の減少が顕著であり、重要な課題となっている。

本章では、海外実習の履修者減少の原因を明確にし、解決策としてフィリピンでの海外実習を検討した経緯と理由について述べる。

2.1. 「海外実習」履修者減少の原因

海外実習の履修者が減少している原因を把握するため、外国語学部の全学年を対象に「海外実習についてのアンケート調査」を実施した（図1）。

＜回答者数 148 人＞

「1 年次：74 人」「2 年次：32 人」「3 年次：22 人」

「4 年次：20 人」

まず、海外実習への参加の有無についての質問では、「海外実習に参加したい・参加するつもり」36 人、「興味はあったが参加していない」87 人、「興味がないため参加していない」25 人という結果になった。このうち、「興味はあったが参加していない」と回答した学生に対し、その理由を聞いた結果が図1である。最も多い回答は「費用が高い」71 人、次いで「語学力が不安」33 人であった。約8割の学生が、費用を海外実習への参加の障壁として捉えていることが分かる。また「海外実習に参加したい・参加するつもり」と回答した学生においても、参加に際しての不安点として費用を挙げた者が28 人おり、全体にすると99 人の学生が費用に対して問題意識を感じていることが確認できた。このことから、海外実習の履修者減少の主因は費用による経済的負担である事が明らかとなった。

なお、昨年度及び今年度の海外実習は日本学生支援機構（JASSO）が提供する「海外留学支援制度」の採択を受けているため、対象となる学生には奨学金6～8 万円、渡航支援金16 万円と最大で24 万円の給付型奨学金を提供しており、学部としても学生の費用軽減に取り組んでいる。加えて本学が提供する「短期留学渡航費奨学金」なども学生に案内している。両制度は併給が可能である。しかし、これらの奨学金制度があっても、依然として費用が高額であると感じている学生が多いことが、アンケート結果から浮かび上がってきた。

また海外実習の改善点についての自由記述では、2 年連続で応募したが最低催行人数に満たず参加出来なかった事や、インターンシップの実習を追加して欲しいといった、海外実習への参加を意欲的に考えている意見が見られた一方で、費用の削減や奨学金の増加を希望する声が散見された。

2.2. 「海外実習」履修者減少の解決策

アンケート結果から、海外実習に興味はあったが参加できなかった学生が多く、その主因は高額な費用であることが分かった。これは学生の海外

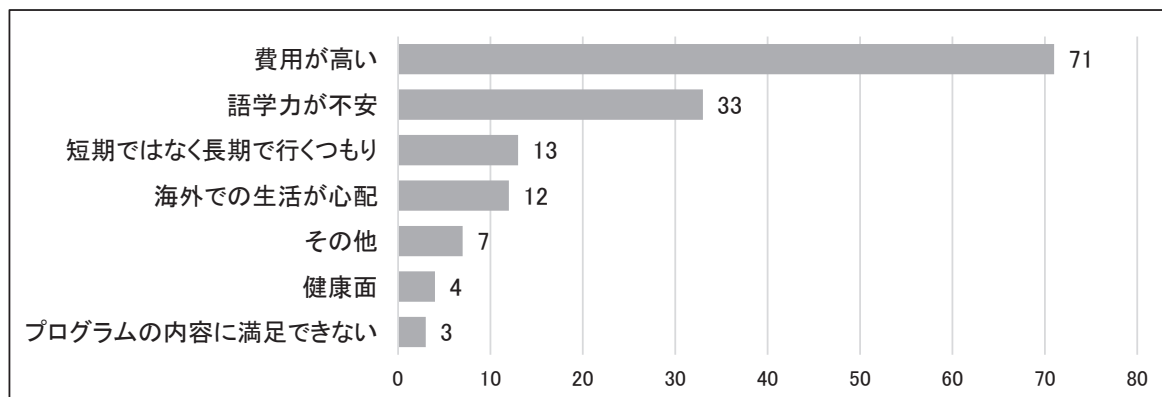


図1 海外実習に興味はあったが参加していない学生 87 人の理由（複数回答）

実習へのニーズは下がっていないと捉えることが出来る。このことから、海外実習の履修者減少において最も効果的な解決策はボトルネックとなっている費用を削減することであると考えた。

2.2.1. 費用削減の効果的な方法

今回、海外実習の費用が高騰した要因は、物価上昇や為替レートの変動などが大きく影響している。これらは大学側での制御が困難であり、今後の予測が不可能な事象である。これに対する費用削減策として、実習先での授業回数や期間を減らすことで研修校の授業料の削減を検討することも考えられるが、単位認定に必要な授業時間数や教育の質を維持することを考えると、現実的な解決策とは言い難い。

そこで、より抜本的な解決策として派遣先の新規開拓を考えた。物価や航空券が安い地域を派遣先とすることが出来れば、大幅な費用の削減が期待できる。このことから、英語の新規派遣先として、フィリピンが費用対効果の面で最適な候補地であると考えた。

2.2.2. フィリピンを選択した理由①：費用面の優位性

まず、フィリピンへの研修費用と今年度の英語圏への海外実習の費用を比較したい。フィリピンへの研修費用は、今回著者が参加したものであり、研修期間も4週間と、実際の海外実習（約3週間）に近い。

表2を見て分かるように、フィリピンの研修費用が圧倒的に安い。フィリピンの研修費用は449,225円であるのに対し、イギリスは約734,239円、オーストラリアでは約641,375円と、いずれも高額である。フィリピンの研修校が民間の語学学校であったため、大学附属となると研修校における授業料に多少の費用増加が予測されるものの、それでも他の英語圏に比べて費用は低く抑えられると推測される。また、フィリピンの物価の安さにより現地での生活費も低く済み、全体的な費用差はさらに広がると考えられる。

表2 各実習の費用の比較（2024年度）

※含まれる費用：渡航費・授業料・滞在費・送迎費

派遣先国	費用
フィリピン	449,225 円
イギリス	734,239 円（概算）
オーストラリア	641,375 円（概算）
アメリカ	950,000 円（概算）履修者無し

2.2.3. フィリピンを選択した理由②：人気の留学先

フィリピンは英語の語学留学先としてコロナ禍前より人気を集めていた。フィリピンでは英語が公用語として使われており、国民の大半は英語を話す事ができる。また、フィリピンの英語力は世界20位（EF EPI 英語能力指数：EF English

Proficiency Index）と世界的にも高い英語力を持ち、質の高い英語教育を提供している事が人気の一つの理由として考えられる（EF エディケーションファースト 2024）。

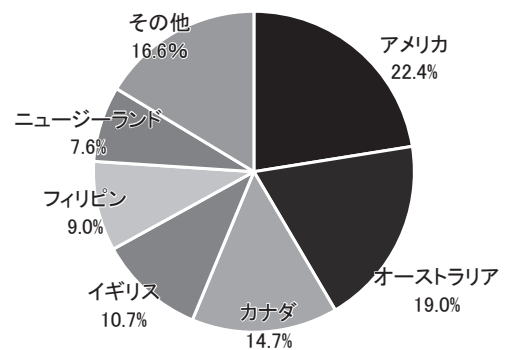


図2 JAOS 2023年 渡航先別留学生数 (64,421人)
（一般社団法人海外留学協議会ウェブサイトより）

図2はJAOS（一般社団法人海外留学協議会（2024））が実施した留学事業者40社を対象とした調査結果を元に著者が再構成したものである。この調査によると、2023年の日本人留学生数64,421人の内、フィリピンへの留学生数は9.0%（5,792人）であった。イギリスの10.7%（6,903人）に次いで5番目に多い留学生数と、フィリピンへの留学が主流となっていることが分かる。このことから、フィリピンが英語留学における新たな派遣先として適しているのではないかと考えた。

2.3. フィリピン海外実習に対する学生アンケート

費用面から見るとフィリピンは新たな派遣先として十分に可能性がある。しかし、授業として成立させるためには履修者の確保が必要となる。そこで、学生がフィリピンにどれほど興味があるのか、またフィリピンへの海外実習に対するニーズについて把握しておくことが重要であると考えた。ここでは、「海外実習についてのアンケート調査」の中でフィリピンへの海外実習に関する回答について私見を述べる。

2.3.1. フィリピンへの興味と学生が重要視する点

学生のフィリピンに対する興味を調査した結果、「行ったことがある」3%（5人）、「興味はあるがあまり知らない」45%（67人）、「名前だけ知っている」39%（57人）、「全く知らない」13%（19人）と、約半数の学生がフィリピンに対して一定の興味を持っている事が確認できた。

次に「フィリピンに対するイメージ」「フィリピン留学で調べて欲しい点」についての自由記述回答を分析した。その結果、フィリピンへの海外実習に参加するかを判断する際、学生は次の3点を重要視すると考えられた。

表3 現海外実習への参加有無とフィリピン海外実習への参加希望度 (n = 148)

		現在の海外実習への参加の有無			合計
		参加した (参加するつもり)	興味はあったが 参加していない	興味がなかったため 参加していない	
実習参加希望度 フィリピン海外	是非参加したい	3人	5人		8人
	参加したい	8人	19人		27人
	検討の余地がある	12人	35人	5人	52人
	参加したくない	9人	12人	12人	33人
	分からない	4人	16人	8人	28人

① 物価・費用

フィリピンへのイメージ調査で最も多かった回答が「物価が低い」であり、フィリピン留学で調べて欲しい点でも「費用」を挙げる学生が散見されたことから、費用が海外実習参加への意思決定に大きく影響していることがうかがえる。

② 語学力の向上

フィリピン留学で調べて欲しい点での回答で「留学している人の語学力」「どれぐらい英語力が向上したか」が多く見られた。フィリピンでの留学を通じてどれだけ英語力が向上するのか、あるいは実際に留学している学生の語学力がどの程度向上しているのかといった、語学力の向上に対する興味・関心があると考えられる。

③ 治安や衛生面

フィリピンへのイメージ調査で、ネガティブなイメージとして「貧困」「治安が悪い」「汚い・不衛生」と回答する学生が多くみられ、調べて欲しい点でも「治安」が最も多かった。現地の治安状況や生活環境について不安を感じている学生が多いことが分かる。

2.3.2. フィリピン海外実習へのニーズ

フィリピンへの海外実習のニーズを調査するため「費用 50 万円程度、フライト 6 時間程度」を条件に、参加希望度を分析した。

その結果が表 3 である。結果は「是非参加したい」5% (8 人)、「参加したい」18% (27 人)、「検討の余地がある」35% (52 人)、「参加したくない」22% (33 人)、「フィリピンを知らないため分からない」19% (28 人) となった。「是非参加したい」「参加したい」を合計すると 35 人となる。今年度の英語圏への海外実習の参加者数「イギリス」17 人、「オーストラリア」8 人と比べても、かなりの人数であることが分かる。また、「検討の余地がある」と回答したのが 52 人と多くの学生がフィリピンへの海外実習に対して前向きであることも分かった。

なお、「是非参加したい」「参加したい」と回答した学生 35 人の内、24 人は「海外実習へ興味は持っていたが参加していない」と回答した学生で

あった。またその 24 人の学生がフィリピンへの海外実習に参加を希望した理由の多くは「費用が安い」を挙げており、経済的な障壁を下げることで、学生の参加意欲を引き上げる大きな要因であることが分かった。

以上のことから、フィリピンでの海外実習を実施した場合、ある程度の履修者の確保が見込めるとともに、これまで参加出来なかった学生の履修を可能にする、履修機会の創出が期待できると考える。

3. フィリピン語学留学の実態

海外実習の実施を検討する上で、授業内容や現地の生活環境、治安は重要となる。また、海外実習には語学力向上だけでなく、異文化交流による学びも狙いにある。本章では、著者の語学学校で過ごした 4 週間の経験と、現地に留学していた日本人へのアンケート調査の結果を踏まえ、フィリピン語学留学の実態について述べる。

3.1. 語学学校の概要

研修先の語学学校「CEGA Global Academy」は、大学附属ではない民間の語学学校であり、生徒数は 30 名前後と小規模である。場所はフィリピンセブ島のセブシティーに位置している。経営者が日本人のため、留学に来る学生も日本人しかいない。英語力の向上という観点からは出来る限り日本人のいない学校を選ぶべきであるが、今回はフィリピンへ留学をしている日本人にアンケート調査を行うつもりであったため、当該校を選択した。

3.2. 語学学校での授業概要

授業は平日 (月～金) 6 コマ (1 コマ 50 分) の全てマンツーマンレッスンを選択した。コマ数や授業形態 (マンツーマンレッスンとグループレッスンの比率) は自由に選択でき、留学中でも変更が可能であった。それぞれが自分に合ったやり方やペースで授業を進められる点は魅力的であった。

授業初日には英語力を測定するため、University of Cambridge ESOL Examinations (ケンブリッジ英検) を使用したテストが実施された。テスト結果を基にレベルに合った教材が準備される。また、定

期的にテストが実施され、生徒の英語力の向上具合に応じてテキストや授業内容が変更されていた。

3.2.1. 授業内容について

著者が受講した授業は5種類あり、語彙や文法・イディオム・リスニング・スピーキング等、包括的に英語能力が向上されるよう授業が構成されていた。それぞれの授業について紹介する。

■ 授業名：「Can you believe it?3」

実話に基づいた英文を読み、その中で使われているイディオムを学ぶ。イディオム単体で学ぶのではなく、実際に使われている例文と併せて学ぶため、どのようなシチュエーションで使うかをイメージしやすい。また、学んだイディオムを教員との会話の中で使うことで、正しい使い方が出来ているかを確認する。

■ 授業名：「DME(Direct Method for Education)」

最も新しいダイレクトメソッドであり、教員が教科書に書かれた質問を読み、生徒は即座に回答する。間違った文法を使うと修正され、正しい文法、発音、さらには回答スピードが揃わないと次の質問に移ることが出来ない。完璧になるまで何度も繰り返すため、自然と口が英語での発音に慣れていくと共に、正しい文法での解答ができるようになった。最初のうちは質問を聞いて答えるだけの授業にそれほど意味を感じなかったが、日が経つうちに日常会話で正しい文法が使えるようになり、会話においても口の動きがスムーズになっていくのを実感した。

■ 授業名：「Impact Issues2」

様々なトピックを基に自分の意見を伝え、相手の意見に対してまた意見を述べるディベート中心の授業である。マンツーマンでディベートを行うため、常に英語を話し続けることとなり、スピーキング力とリスニング力の向上が感じられた。

■ 授業名：「Breaking News English」

リスニングと語彙が中心の授業である。実際のニュース文が虫食いになっており、音声聞いて埋めていくが選択肢は準備されていない。リスニング後には、文章内で使われた単語と意味をマッチさせる問題と、類似語をマッチさせる問題を行う。最後にニュース記事についてディベートを行う。段階的に学ぶことで、最初は理解できなかった内容が、最終的には理解できるようになる。

■ 授業名：「What Do You Think? 2」

お題文を読んで、自分の考えを何故そう考えたのかの理由を併せて述べるディスカッション中心の授業である。お題となるトピックが“Child Labor” “Risky Business” “Population of World”といった少し固い内容になり、日常会話レベルを超える英語力が求められる。最も難易度が高い授業であったが、日常会話では使わない言い回しや単語を学ぶことができ、より高度な英語力を身に

付けられると感じた授業であった。

3.2.2. 授業に対する所感

授業内容は全体的に非常に満足できるものであり、英語力も向上したと感じている。テスト結果でも、初日のテストが3H (Pre-INTERMEDIATE)、3週目のテスト結果がB1 + (INTERMEDIATE)と向上していた。特にリスニング力とスピーキング力が向上したと実感できた。教師の質に関しても、多少のフィリピン独特の訛りは感じられるが、海外で英語の教師をしていたなど、経験豊富な教師が多く不満は一切無かった。

フィリピン語学留学において魅力的だと感じた事はマンツーマンレッスンである。グループレッスンに人が足りない時に何度かグループレッスンにも参加したが、英語を話す回数がマンツーマンレッスンの10分の1以下であった。グループレッスンはリスニング力や人前で英語を話す練習にはなるが、英語を使う回数が少ないためスピーキング力の向上はあまり見込めないと感じた。一方、マンツーマンレッスンでは常に話し続けることができ、分からない単語があった際にも理解できるまで遠慮なく質問することが出来る。マンツーマンレッスンとグループレッスンとでは成長速度に圧倒的な差が生まれると感じた。

また、マンツーマンレッスンをこの価格で提供でき、かつ教員の英語力が高いのはフィリピンぐらいだと思う。ネイティブ英語で学ぶ事の魅力もあるが、英語を全く話せない状態であれば、まずは英語を話せるようになるために、費用が抑えられるフィリピンへ留学し、ある程度英語が話せる状態になってから、アメリカやオーストラリアといった英語が第一言語として使われる国へ行く方がより効率的に英語を学べると考える。

3.3. 日本人留学生へのアンケート調査

フィリピン語学留学に対して客観的意見を取り入れるため、実際にフィリピンへ語学留学に来ている日本人留学生へアンケート調査を行った。

アンケートでは「フィリピンを留学先に選んだ理由」「留学前と留学後の英語力の向上」「治安・衛生面に対する評価」「フィリピン留学の満足度」「フィリピン留学のオススメな点や注意すべき点」を質問項目とした。

語学学校の定員が30名と小規模校であったため、思った程の回答数が得られなかったのが心残りであるが、回答内容からはフィリピン語学留学の魅力と懸念が見えた。ここではアンケート調査の結果について私見を述べる。

<アンケート回答者15人>

「社会人：10人」「大学生：4人」「高校生：1人」

3.3.1. フィリピンを選んだ理由

フィリピンを留学先に選んだ理由では、最も多

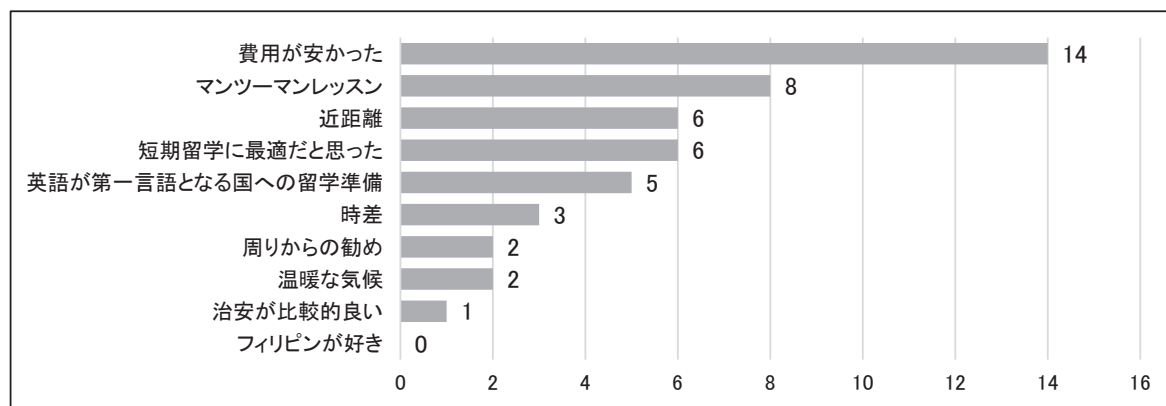


図3 日本人留学生在がフィリピンへの留学を選んだ理由

かったのが「費用が安い」14人、次いで「マンツーマンレッスン」8人であった（図3）。

改めて費用の低さが魅力的であると感じる人が多いことが分かった。またマンツーマンレッスンが充実しているため「短期留学に最適」という回答も多く見られた。特に社会人などは長期の休みが取れないため、短期間での英語力の向上が期待出来るマンツーマンレッスンのニーズが高いことがうかがえる。

そのほか「英語が第一言語の国へ留学する準備」といった回答も多く見られた。留学していた社会人に話を伺ったところ、フィリピンでの留学後に海外での就労やワーキングホリデーを予定しているケースが多かった。費用が安いフィリピンで英語力を磨き、その後、英語が第一言語として使われる国で働くというのは非常に合理的であると感じた。

3.3.2. 英語力の向上に対する評価

フィリピン留学による英語力の変化を「かなり向上した」「少し向上した」「向上していない」「現時点では分からない」の4段階で評価してもらった（図4）。

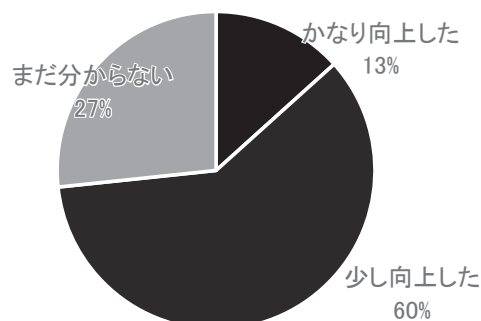


図4 日本人留学生在のフィリピン留学での英語力向上に対する評価

結果は「かなり向上した」13%（2人）、「少し向上した」60%（9人）、「まだ分からない」27%（4人）であった。半数以上は英語力の向上を感じており、「かなり向上した」と回答した生徒の中には、留学前は全く英語を話せなかったが、留学後

は日常会話が理解でき、誤りはあるが文章で会話が出来ようになったと回答していた。また、向上したと回答した人のほとんどが、特に向上したと感じる能力として「リスニング力」と「スピーキング力」を挙げている。マンツーマンレッスン特有の会話の多さや、日常生活でも英語に触れる機会が多いことがリスニング力やスピーキング力の向上に大きく貢献していると考えられる。このことから、フィリピン語学留学は英語力の向上において効果的であることが分かる。

なお、懸念点として考えられる非ネイティブ英語の教員についてであるが、教員の英語、特に発音に対して違和感を述べる生徒がいた。しかし、語学学校では教員の変更を希望することが可能であったため、それについて大きな不満に繋がることはなかった。

3.3.3. フィリピンの治安

フィリピンの治安について「非常に危険」「危険」「少し危険」「あまり危険でない」「全く危険でない」の5段階で評価してもらった（図5）。

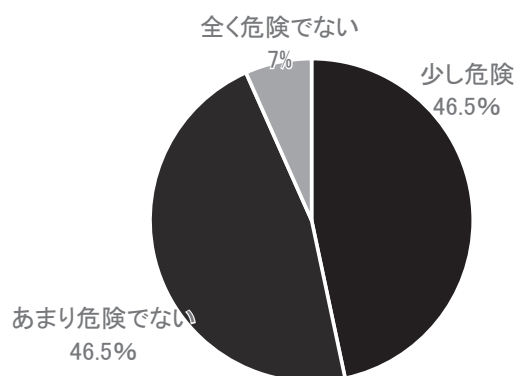


図5 日本人留学生在のフィリピンの治安に対する評価

結果は「少し危険」46.5%（7人）、「あまり危険でない」46.5%（7人）、「全く危険でない」7%（1人）であった。「非常に危険」「危険」と感じた人はいなかった。

危険を感じたと回答した人の理由には物乞いやストリートチルドレンの多さが挙げられた。現地の街中にはホームレスやストリートチルドレンなどが散見され、スリや窃盗も頻発していると聞いた。また、夜間や特定の地域は特に治安が悪いことなど、日本と比べると警戒が必要だと感じた。一方、現地で大きなトラブルに巻き込まれたという回答はなく、むしろ想像していたより安全と回答している人もいた。

なお、外務省の危険レベルではフィリピンはレベル1（2024年10月28日時点）とされており、これは現在実施しているインドネシアと同様である。このことから、日本と比較すると治安は悪いが、海外実習が実施できない程ではないと考える。なお、実施に当たっては現地での生活における危機管理についての説明は、徹底する必要がある。

＜アンケート記述（危険を感じた理由）＞

- ・物乞いやホームレスが多い。
- ・タクシー等でのぼったくり。
- ・寮の近くで強盗にあった人がいると聞いたため。

＜アンケート記述（危険を感じなかった理由）＞

- ・夜は危険な場所もあると聞いた。ただ日中は安全だと感じた。
- ・不安を抱えてきたが危険な目には遭わず、優しく声を掛けてくれた。
- ・何も盗まれなかった、夜間でなければ怖くない。

3.3.4. フィリピン留学の満足度（良い点と悪い点）

フィリピン留学に対する満足度を「非常に満足」「満足」「あまり満足していない」「不満足」「まだ分からない」の5段階で評価してもらった（図6）。

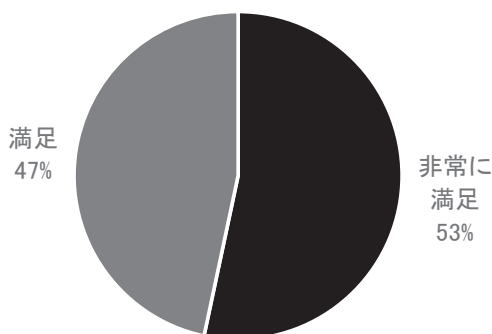


図6 日本人留学生の
フィリピン留学の満足度

結果は「非常に満足」53%（8人）、「満足」47%（7人）と、フィリピン留学の満足度の高さがうかがえる。

なお、フィリピン留学の「良い点やオススメな点」についての自由記述では、フィリピン留学を選んだ理由と同様に費用の安さ、マンツーマン授業のほか、教員が陽気で楽しいといった記述も多く見られた。フィリピン人は明るく社交的な人が多い。フィリピンが元々スペインの植民地であっ

たことも関係しているのか、ラテン的な雰囲気が強くと感じられ、授業の雰囲気が非常に良く、特に英語を話すことに対して慣れていない初心者には適していると感じた。

「悪い点や注意すべき点」については、食事やシャワーの水圧といった衛生面の記述が散見された。食事に関しては米が主食となるが、脂っぽく非常に味が濃いため食事が合わない生徒もいた。また、発展途上国であることからインフラが整っておらず、水圧が弱いことや街中でゴミや下水などの異臭がするといった事もあり、生活環境に対してストレスを感じる生徒もいた。この辺りは募集の段階でよく説明し、ギャップとならないようにしておく必要があると考える。

＜アンケート記述（良い点・オススメな点）＞

- ・マンツーマンでスピーキング練習に辛抱強く付き合ってくれる。基本的に先生が陽気なので楽しく英語を話せる。
- ・費用が安くマンツーマンが多いので英語が全くできない人でも挑戦しやすいかと思う。
- ・マンツーマン授業が充実している。また、グループ授業でディベートなどをするためマンツーマンでは得られない相手を説得させる英語力が養われる。
- ・物価が安く、大学生でも来やすいと思う。また、安価でマンツーマン授業をやってくれるので話す機会が多い。

＜アンケート記述（悪い点・注意すべき点）＞

- ・ご飯が口に合わない時がある、シャワーなど水圧が弱い。
- ・長期での留学となると食事が合わない人や環境でモチベーションが続かない可能性がありそう。
- ・東南アジア特有の環境の汚さには注意、慣れれば問題ない。
- ・日本と同じ感覚で夜間に外出、水道水を飲むなどは気をつけたほうが良いと思う。

3.4. 異文化体験

海外実習の目的の一つである異文化体験について、フィリピンという発展途上国で生活する事で得られる学びは多いと考える。ここでは、フィリピンで体験する事ができる異文化について、著者の体験を基に紹介する。

3.4.1. スラム街、貧困層の生活

フィリピンにはスラム街が数多く存在しており、その生活は日本人の想像をはるかに超えるものである。研修期間中に訪れたスラムでは、周辺がゴミで溢れかえっており、異臭が漂っていた。水道も通っておらず劣悪な生活環境であった。また、スラムに住む子供の多くは教育を満足に受けられず、その結果、ホームレスや物乞いをしてい

る事が多いようである。学生がスラムの生活を目の当たりにする事で、日本の恵まれた環境や、世界の貧困問題、教育の重要性等について考えるきっかけになると考える。

3.4.2. 宗教と社会問題

グローバル社会で活躍していく上では、宗教に関する知識は必須であると考ええる。フィリピンの8割はカトリックであり、その影響は非常に強い。フィリピンでは法律で中絶が禁じられており、性教育はタブー視されている。そのため性教育が満足に受けられず若くして妊娠し、学校を辞める若者が多い。一方、その影響で若者の人口が増加し、国が発展しているという正の影響もある。また、フィリピン南部に多いムスリム教徒との争いなど、フィリピンでは日本ではあまり感じられない宗教による様々な社会問題について考えるきっかけになる。

3.4.3. 政治への高い関心

語学学校の授業ではお互いの国について話すことが頻繁にある。その中でも多かったのが政治についてである。フィリピンの現大統領のマルコス・ジュニアとなってから治安が悪化していることや、ドゥテルテ前大統領に関するメディアの報道と現実の違いなど、日本から見ているだけでは分からない事実は非常に興味深いものであった。フィリピン人の政治への関心の強さから学ぶ事が多くあると考える。

4. 「海外実習」 受入先大学の調査

海外実習を実施するためには、受け入れ先大学を確保する必要がある。大学の授業として学生に提供し単位認定を行うことから、調査対象は民間の語学学校ではなく、大学または大学附属の語学学校とした。本章では、現地大学における海外実習の受入れの可能性について調査した結果を述べる。

4.1. 調査概要

今回調査した大学は表4の5大学である。セブ島の中でも大規模大学とされている大学を中心に、現地の語学学校の教員から勧められた大学について調査した。

表4 調査大学の一覧

大学名
University of San Carlos
University of San Jose-Recoletos
University of Cebu
Southwestern University
Cebu normal University

4.1.1. メールによる事前調査

研修期間中に大学へ訪問する事を考え、USC (University of San Carlos)・USJ (University of San Jose-Recoletos)・UC (University of Cebu)の3大学に対し、3週間のプログラムを提供しているかどうか、研修期間内で直接訪問が可能かどうかについての確認メールを送ったが、USCを除いて返信が無かった。(USCからは相談内容に対応するオフィスのメールアドレスを紹介されたためメールを送信したが、それ以降返信が途絶えた。)現地到着後にも複数回メールを送信したが返信は無く、語学学校の教員に確認した所、フィリピンでは返信が返ってこない事が珍しくないようであった。

4.1.2. 大学への直接訪問

メールでの確認が出来ない事が分かったため、直接大学に訪問し確認することとした。常識的には先にアポイントメントを取っておくべきだが、返信が無い以上仕方がなかった事を述べておく。

結論から言うとUSCとUSJに訪問したが、大学のキャンパスに入る事すら叶わなかった。フィリピンの大学は日本のように誰でも入れる訳ではない。入り口にはゲートがあり警備員が待機しており、セキュリティが厳しい(写真1)。



写真1 USCのゲート【著者撮影】

校内に入るため警備員に事情を説明すると、大学のスタッフを紹介された。京都産業大学の英語表記の名刺とパスポートを見せた上で、日本の大学で働いていること、海外実習の新規受け入れ先を探している事などを説明し、話をさせて欲しいと伝えたが、先にメールを送りアポイントメントが必要だと言われ許可されなかった。既に何度もメールを送ったが返信がない事を伝えたが、許可出来ないとのことであった。

4.1.3. 語学学校の教員を通じた調査

次の手段として、語学学校の教員を通しての調査を行った。語学学校の教員にこれまでの経緯を

説明すると、快く協力してくれた。海外実習の目的や期間、人数、滞在先の確保、その他プログラム実施にあたって必要な事を説明し、確認をお願いした。教員は表4の5大学にメールや直接訪問し確認を行った。その結果分かった事が、セブ島には短期間での留学プログラムを実施している大学が恐らく存在しない事である。唯一 USC では過去に実施をしていたが、現在は実施していないようであった。

4.1.4. 受入先大学の調査結果

今回の調査では、海外実習の受入れ可能性のある大学は見つけられなかった。調査をして感じた事が、現地の大学とのコンタクトが非常に取りにくい事である。報告内容からも分かるように、語学学校の教員を通じてしか現地大学とのコンタクトが取れなかった。このことから、フィリピンで調査をする上では現地の大学で働く教職員とのコネクションが極めて重要になると感じた。また、3週間といった短期間でのプログラムを提供している大学がセブ島には存在しない可能性が高く、実施するためには本学用にプログラムを作成してもらう必要がある。受入れ先大学の調査については課題が残る結果となった。

なお、今回は履修者確保の観点から、リゾートのイメージが強いセブ島がより履修者を確保できると考え、あえてセブ島を選択した。しかし、フィリピンの首都であるマニラであればセブ島よりも大学数が多いため、受入先大学の確保の可能性は高まると考える。そのため、フィリピンでの海外実習の実現には、学生のニーズを調べながらにはなるが、マニラでの実施も考える事が海外実習実現に繋がると考える。

5. まとめ

以上、4週間の語学学校での生活と、フィリピン留学中の日本人留学生へのアンケート調査を基に、フィリピン海外実習を見据えたフィリピン語留学の実態調査の結果を報告した。以下、フィリピンでの海外実習の実施におけるメリットと懸念点についてまとめた私見を述べまとめとする。

調査結果として、フィリピンへの語学留学は非常に魅力的であり、新規の海外実習派遣先とする事で、これまで費用の問題で海外実習へ参加できなかった学生の参加を促すとともに、英語力の低い学生の英語力の底上げに貢献できると考える。これにより、学生全体の英語力の上昇に繋がるとも期待できる。また、満足度が高いフィリピンへの海外実習は、長期留学への動機づけにもなると考えられ、結果的に留学者数の増加に繋がる事も考えられる。加えて、発展途上国での異文化に触れることで人間としての成長にも期待できると

考える。

教員が非ネイティブであることや、治安、生活環境については懸念もあるが、これらの問題は募集の際にしっかりと説明し、履修する学生が納得していれば、大きな問題であるとは思っていない。一方、受入先大学については課題が残る結果となったが、派遣先地域をセブ島にこだわらず、首都であるマニラも対象とすることで、受入先大学の課題解決の可能性は高くなると考える。学生のニーズを確かめつつ、プログラムの内容や地域について検討していく事でより効果的な海外実習が実現できると考える。

＜フィリピン海外実習におけるメリット3点＞

① 【費用】

日本から距離が近く航空券が手頃であり、物価も低いため、現地での生活費も抑えられる。さらにマンツーマンレッスンを低価格で受ける事が可能。低価格でプログラムを提供することで、これまで海外実習に参加できなかった学生が参加できるようになる。

② 【短期間での英語力の向上】

マンツーマンレッスンのため短期期間でも英語力の向上が狙える。またフィリピン人は明るく社交的で話しやすい。日本人留学生へのアンケート調査にもあったように、楽しみながら授業を受けられるため、特に英語力が低い、英語を話すのが怖いという学生には最適。

③ 【異文化交流】

発展途上国であることや、生活環境やインフラが日本と比べて大きく違う。また貧困問題や宗教による社会への影響など、異文化から学べる事が多く、人間としての成長が期待できる。

＜フィリピン海外実習における懸念点4点＞

① 【非ネイティブ英語】

フィリピンでは英語が公用語であるが、その英語力はネイティブと同水準ではない。特に発音においてはフィリピン訛りが感じられる事もあり、中には綺麗な英語ではない教員もいる。しかし、語学学校では教員の変更を希望する事が出来るため、それほど大きな懸念点ではないと考える。

② 【生活環境】

発展途上国のためインフラが整っておらず、シャワーの水圧が弱いことや、排気ガスによる大気汚染、ゴキブリや蟻・ハエといった虫が大量にいる。これらは我慢することによって解決できる問題だが、学生の不満に繋がる可能性も高い。

③ 【治安】

どの国にも当てはまる事だが、治安は日本より悪く、現在セブ島の治安は悪化して

いる。ホームレスやストリートチルドレンが散見され、特にスリが多いため実施するにあたっては学生に注意を促す必要がある。

④ 【受入先大学の開拓】

セブ島の多くの大学では3週間程度の短期間での留学プログラムが存在していないため、実施するには先方大学と一からプログラムを作る必要がある。また、コンタクトを取ることが難しく、大学訪問も受け入れてもらえないため、現地大学とのコネクションを持つ人材が必要。

参考文献

- EF エデュケーションファースト (2024) 「EF English Proficiency Index 世界最大の英語能力指数連キング第2023版」 <https://www.efjapan.co.jp/epi/> (取得 2024.10.18)
- 一般社団法人海外留学協議会 (2024) 「一般社団法人海外留学協議会 (JAOS) による日本人留学生数調査2023」 https://www.jaos.or.jp/wp-content/uploads/2024/05/2024JAOS%E7%95%99%E5%AD%A6%E7%94%9F%E7%B5%B1%E8%A8%88%E8%AA%BF%E6%9F%BBPDF_2023_240521.docx.pdf (取得 2024.10.18)

A Study on the Actual Situation of Language Study in Cebu, Philippines: Exploring A New Short-Term Overseas Study Destination for the Faculty of Foreign Studies

Yugo WATABE¹

This study investigates the language study situation in Cebu, Philippines, as a potential new destination for the Faculty of Foreign Studies' "Overseas Studies in English" program. It was undertaken to address the decline in the number of students wishing to study abroad after the COVID-19 pandemic, particularly the significant decrease in those enrolling in the "Overseas Studies in English" program. The primary reason for this decline is attributed to rising costs.

The study found that the benefits of conducting the "Overseas Studies in English" program in the Philippines include: (1) low costs, (2) the possibility improving English proficiency in a short period of time, and (3) opportunities for intercultural

exchange. The one-on-one lesson format creates an environment for learning English efficiently, and the costs are considerably lower compared to other English-speaking countries. On the other hand, concerns include (1) the use of "non-native" English, (2) issues related to living conditions and safety that are typical of developing countries, and (3) securing partnerships with universities.

Based on the study, this paper reports the potential, benefits, and concerns of considering the Philippines as a new destination for the "Overseas Studies in English" program.

KEYWORDS: Overseas Studies, Language Study in the Philippines, English Proficiency Improvement, One-on-One Lessons

2024 年 11 月 27 日受理

1 Faculty of Foreign Studies Administration Office, Kyoto Sangyo University